

箱館役所で煩雑な手続、間宮林蔵との出会い（北海道）

寛政十二（一八〇〇）年五月二十二日（陽曆七月十三日） 朝薄曇、五ツ頃より晴天、夜は曇る。朝六ツ後出立。一里札苅、一里泉沢、三里半茂辺地、一里半富川、十町程三谷、二十町程有川、与戸切地、隣村、三里強函館、一里程前に亀田村あり。七ツ頃着宿。地蔵町伊藤茂左衛門、忤幸治郎。

風が悪くて船を断念。吉岡から徒歩でようやく到着。宿舎は伊藤茂左衛門だった。

着後同所御役所へ御届け致候。函館御詰合御勘定水越源兵衛殿、支配勘定寺田忠右衛門殿、御普請役小林新五郎殿、外に御普請役布山牧三郎殿、御先手組同心井上喜左衛門殿迄相回候。 此日御添触を小林氏へ渡す。

到着と同時に、御勘定（旗本）をトップに現地詰めの役人全部に挨拶して回り、江戸で貰った「添え触れ（指定された数の人馬を安い公用旅行者の賃金で雇える）」を返し、書類で到着を届け出る。

以書付奉申上候

一、私儀、先月十九日江戸表出立、当月十日津軽領三厩へ着。十一日より十八日迄風待仕候て、十九日渡海仕候処、風不宣松前領吉岡村へ漸着船、十九日・二十日迄風待仕候え共箱館渡海相成不申候に付、無抛陸路を罷越今日当着仕候。右御届奉申上候。 以上、

申五月二十二日

伊能 勘解由

蝦夷御掛 御役人中様

散々な目にあつたことを述べているが、函館役所から蝦夷地内の添え触れを貰わないと旅行はできない。なるべく早く頂きたい意味があつたのではなからうか。

それより同所蝦夷御用会所へ立寄申候。

蝦夷地御用取扱人 柄原屋庄兵衛 村山伝兵衛

平岩屋 平八 伊達屋林右衛門

次は商売や宿舍、旅行用人馬の手配をする会所に挨拶する。幕府は寛政十一年に東蝦夷地直轄に当たり、場所請負制度を廃して直掬としたが、蝦夷地から送られる産物を処分し、各場所の必要な仕入物を取り扱うため、同年五月江戸霊巖島に蝦夷会所を設けた。会所には蝦夷地御用掛の吏員も詰めた。

一方、東蝦夷地の各場所の運上屋は会所と改められ、幕吏が詰め合い、従来の運上屋としての機能のほか、公務をも行う出張役所としての性格を持つようになった。建物の全部が立て替えられ、或は新設されて、旅宿所・倉庫・作事小屋・番屋・厩・堂社などの付属建物なども増加していった。この頃は、会所などの建物の建て替えや整備が始まるうとしている時だった。

亀田村の御役所三橋藤右衛門殿へ箱館御役所へ差出候書付同様小紙に書記し差出し申候。
御用人大塚一郎殿、武藤貫三殿。侍鵜沢幾太、是は宿所へ見舞くれ候。

そのつぎは、駐在している目付の三橋氏へ挨拶。幕府の制度では行政の執行には必ず目付が同席したが、函館にも駐在して用人、侍などをしたがい、蝦夷地経営を監察していた。三橋氏は歴史に登場する人物だが、さすがに、忠敬に返礼として侍の鵜沢を見舞いの使者として出している。

同二十三日 朝より九ツ後迄曇り、それより七ツ頃まで晴、七ツ過より曇、夜もまた曇天。逗留。

同二十四日 朝五ツ頃迄小雨、それより九ツ頃迄曇夜また同じ。逗留。

同二十五日 朝五ツ半頃迄曇る。それより晴、又七ツ頃より小雨、夜も曇る。雲間に少間測量。此迄ヤマセ風なり。此朝召連候下人長助病気を申立達て暇を願候に付御役所へ相伺長暇を差遣し、三厩へ乗合船有之候よしに付、船賃合力の上无路用金尅分用達遣候。此日逗留。

天氣が不順、添え触れが貰えないので、いらいらしているところに、下僕の長助から病気なので、暇を欲しいといわれる。難航の状況を眺め、下人なりに居酒屋あたりで、これから向かう蝦夷地の情報を仕入れていやになったのだろう。三厩までの船賃を与え、路用一分を貸して暇を出す。

同二十六日 朝五ツ後迄晴、九ツ後迄小雨、七ツ後より曇る。暮より五ツ頃迄小雨、それより中雨南風なり。逗留。御役所へ添触を願置、此節津軽御家中笹森勘解由と云る箱館詰の役人、竹内甚左衛門殿よりの書状持参、宿所へ御見舞被下候、扱南部領津軽領旅行よりは迄冷気にて朝暮重服。此日太陽を測。

たまりかねて役所に添え触れの催促をする。津軽家中から見舞いの使者が来てうれしかったらしい。

同二十七日 朝より四ツ半頃迄曇天、それより晴天夜も度々曇る。南風、年中太陽を測。夜もまた少間測量。此日すこぶる暑気、初て単物を着、夜は裕を着ず。逗留。亀田御役所へ蝦夷地出立を届。

添え触れを渡すから、出発届を出せといわれたのであろう。まずお目付の役所へ提出する。一寸、順序が違う感じがするが、道中管理を目付けがやっていたのかも知れない。寒暖の差は激しかった。

同二十八日 土用、朝五ツ後迄曇る。それより晴天江戸出立後の上天気なり。併し山々白雲おおし、箱館山に登て所々の方位を測、夜も晴測量。此日箱館御役所へ蝦夷地出立を届、先触を出す。尤御添触相渡る。

天候回復、江戸出立以来の上天気、函館山に登って道内、本州各地の方位を測る。本州各地の方位は本州と北海道の位置を確定させるために重要だった。そして箱館御役所に出発を届け、添え触れを貰

つて写しを作り、自分の先触れを出す。

覚 御添触の写し。

- 一、 馬 一疋
- 一、 人足 三人

右は此度蝦夷地為御用、津田山城守領分、下総国佐原村元百姓当時浪人伊能勘解由その地へ被差遣候間、書面の入馬同人申談次第、相定の賃銭請取之 無遅滞可差出之 渡海、川越、止宿等之儀、是又指支無之様、且一か所に三・四・五日宛逗留之儀も可有之間、その心得にて執斗可申候。 以上。

申五月 箱館御番所 御印

箱館よりクナシリ迄

右村々場所場所名主支配人

以上は添え触れの写しで、先触れに添付される。本文は忠敬が携帯し、必要なら見せる。

先触

從箱館クナシリ迄 伊能勘解由

- 一、 馬 一疋
- 一、 人足 三人

右は我等儀、蝦夷地測量就御用、上下五人、明二十九日箱館出立、クナシリ辺迄罷越候間、書面の人馬御定の賃銭請取之 聊無遅滞、差出繼立渡海、川越、止宿等の儀、是又指支無之様、且一か所にて三・四五日宛逗留の儀も可有之候。 尤天氣次第村々場所場所にて日限延引も有之候間、アツケシ、クナシリ辺迄は行届申間敷候間、その心得にて執斗可給候。 以上。

申五月二十八日

伊能勘解由

箱館よりクナシリ迄

右村々場所場所名主支配

箱館村役人より先触の奥へ添触。

- 一、 伊能勘解由様御先触の通、村々宿々無遅滞繼立可被申候。 尤村々において御逗留有し筈に候間、右御先触御着被成候上にて、先々へ継送り可申候。 已上、

函館月番 矢川四郎左衛門 印

長谷川太左衛門 印

いよいよ出発。この間にも大方位盤の部品を忘れて、これを探索する騒ぎがあつたが省略する。

同二十九日 朝より暮まで晴天。旅行甚暑、朝五ツ後箱館を出立。亀田御役所へ相届 五里大野村へ七ツ後に着、止宿。

此日函館より間縄を以方位測量致し候えども中路にて日もたけ間縄難及候に付、足間を以大野迄相測り候。此夜曇天雲間測量。

師匠・高橋至時との打ち合わせで、蝦夷地測量では、本州は步測、蝦夷地は間縄を張ると決めていたので、この日は朝から間縄を張ったが、約半分の距離で日が傾いてしまったので、後は步測で測ったという。緯度一度の計測という目的があつたのに、步測とは余りに粗すぎると感じるのは筆者ばかりではないだろう。

幕府に提案してから、実現まで時間がかかり過ぎていた。江戸から北海道根室附近までを徒歩で往復するのに、陽暦六月の出発では遅すぎた。遅いのは分かっていたので、本州は步測とし、急ぎに急いだ船待ち、お添え触れ待ちに時間を費やし、北海道の間縄をあきらめたのがこの日だった。

同晦日 大野村逗留。朝曇る。五ツ後より昼夜晴天、夜測量。

六月朔日 朝六ツ後出立。此日朝より七ツ後迄晴天、夜四ツ後より雨、夜半より大雨。四里四町、(四里四町四十間と有)内浦ダケの桮、スクノツペという山の間に休所一家あり。 此前に大沼、小沼あり。それより四里、(合八里半という。)鷲の木村に七ツ半頃に着。止宿。大野村より少し先に一の渡り有り。村上嶋之丞殿在宅に付見舞。

追い打ちをかけるように、雨に妨げられている。朔日は幸いに昼は晴れ。八里半測って大野村に止宿。一の渡りに村上嶋之丞を訪問する。村上は松平定信の伊豆相模巡視の案内をし、近藤重蔵の従者として始めて蝦夷地に渡り、二度目は蝦夷地取締御用掛松平信濃守の下について蝦夷に渡った測量家であつた。この時は蝦夷会所の普請役雇として、植林指導などにあたっていた。おそらく忠敬は蝦夷地の正確な情報とか、定信の測量や地図についての考え方などをききたかつたのだろう。会話の内容は、日記に書いてないのでわからないが、帰りにも寄っており丁寧な扱いである。筆者は教えを乞うたと考える。

この対談の席に間宮林蔵が同席したことは、ほぼ確実と考えられる。林蔵は村上の従者をしていて、従者は主人の対話の席に出ることはないと思うが、門人としてなら測量談義を拝聴してもおかしくはない。推測だが忠敬は話のキツカケに自慢の測量器具の一部を持参したかも知れない。

日記には何も書いてないから、忠敬の方からは林蔵の印象は薄かったかもしれないが、あとで、林蔵は忠敬に無心して小方位盤二個を譲りうけており、間宮側の印象は強かつたようである。後年、忠敬は間宮を門人といっているが、この時の出会いがキツカケだつたと思う。

同二日 朝より雨天、夜も同じ。依之逗留。

依然、雨にたたられている。